



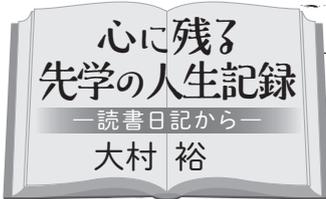
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.255
2024.12.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第43回 (最終回)

連載を終えるにあたって

今回で私の連載エッセイを終了する。愛読して下さった読者の皆さまには、厚く御礼申し上げます。

さて、この連載を依頼してきた担当者からは、当初私の考古学研究の回顧を執筆して欲しい、との意向であった。しかし、先年思うところがあって私の考古学研究の歩みをつづた「自叙伝」(『身の丈』の考古学一下総考古学研究会と共に一)2016年)を自費出版し、既にかき残しておきたいことはすべて吐き出してしまったので、もはや本紙に書き足すようなことはない。それで、大きく視点を変えて、私が刺激を受けた諸先学の歩みを概観することによって、私自身の考古学への思いを暗に重ね合わせることにした次第である。

私は大学で考古学専攻の課程を卒業したわけではなく、また職業においても考古学とはほとんど無縁な高校教師を30数年間勤めあげてきた。しかも共働きで、家事や育児、および翌日の教材研究に時間を取られて考古学の勉強に専念するゆとりはほとんどなかったのである。このような日々を送りながら、どのような分野ならば自分でも考古学研究が続けられるのか、どのような方法を駆使すればそれを実現できるのか、ということを常に一生懸命考えてきたのである。この折に参考になったのが、諸先学が書き残した「自叙伝」や「伝記」だった。

この連載を通読して下さった読者には、もうお気づきのことと思われるが、研究環境に恵まれず、学歴のハンディを抱えていた在野研究者が多く取り上げられているのはこのためである(一部例外あり)。恵まれない環境の中にあっても、それに負けることなく、学問に向けられた諸先学のすさまじいエネルギーは、ともすると現状に押し流されてめげそうになる私を鼓舞してくれた。特に直良信夫博士・酒詰仲男博士・森本六爾氏の自伝・伝記は、手垢にまみれている。私の拙い紹介文が、現在恵まれない環境で苦闘している若い学徒たちの参考になるならば望外の喜びである。

なお、日本の考古学研究者にとってはなじみのある、鳥居龍蔵・松本彦七郎・八幡一郎・小林行雄・中谷治宇二郎など諸先学の自叙伝・伝記類も存在するが、今回は取り上げることが出来なかった。それらは、既に別の文献(『日本先史考古学史講義—考古学者たちの人と学問—』六一書房 2014年)に紹介したことがあったので割愛した次第である。ご了承願いたい。

私が大学に入学し、考古学の世界を覗き始めてから、はや54年の歳月が過ぎ去っている。斯学の研究や発掘調査を生業としないで、よくここまでたどりつけたものと思う。これを支えてくれたのは、『山内清男・先史考古学論文集』(私の考古学の教科書)と諸先学の人生記録、そして下総考古学研究会という組織、ならびにここに集う仲間たちであった。一介の市民が本格的な研究を行なうことは、容易なことではない。それでも私が何とか食いついて来られたのは、上記に挙げた書籍や仲間たち

に負うところが大きい。色々な幸運に恵まれてここまでたどりつけたことを学問の神様に感謝したい。

ここまで書いてきて、同志の故角張淳一さん(本紙創刊者)の軌跡とその人柄が脳裏に浮かんできた。氏は、國學院大学卒業後、スーパーマーケットで働き、かつレンタルビデオ店の経営にも携わっていた。そしてその後、ご息子が1歳になった頃、母校の大学院に進学したという。既に家庭を抱えながらの凄まじい修行生活であった。その後、アルカ考古学研究所を創設し、自らも数万点の石器の実測図作製・分析・研究に精魂を傾けてきた。そうした中で、かの「前期旧石器捏造事件」をあばく口火を切り、学界全体がこの事件に一応の「決着」をつけた後も、執拗にその真相と背景の解明に全力を尽くし、そして力尽きて50余年の短い生涯を終えたのであった。まさに考古学とたたかって討ち死にしたような人生であった。

思えば、氏との出会いは、2001年の秋のことであった。信州大学において実施された信州縄文文化研究会の例会に参加した折、偶々氏と同席した。例会終了後、氏は十年の知己のような表情で私に初対面の挨拶をしてくれた。その後、抜刷などを折に触れ送ってくれたほか、私が2003年に「下総考古学研究会資料室」を開設すると、以前より氏と交流があった高橋良治氏を通じて過分なご祝儀を送って下さったのである(たった一回の対面しかなかったにも拘わらず)。多分私に対し、自分と同じ「におい」を感じ、格別の親近感を持ってきていたのではないかと思う。時折かかってくる電話では、氏の考古学の熱情に圧倒されることが多く、たじたじとなったことが一再ならずあった。

また、こんなこともあった。ある遺跡出土の中期縄紋土器を観察して所見を述べてもらいたい、との要請が角張さんから私にあった時のことである。その出土遺物を取り巻く人間関係を考慮すると、「私が出しやばらない方がよいのではないですか」と意見を申し上げたところ、間髪を入れず、「先生(面はゆい)ことであるが、角張さんは私をそう呼んでいた)、そんなこと(人間関係)は(学問に)関係ないんじゃないですか」と、いつになく厳しい口調でたしなめられたのである。この直後角張さんは急逝したのでこの実査はお流れになったが、上記の一言は角張さんの学問に対する真摯な情熱を物語るものとして心の中に深く刻まれたことであった。

今回の連載において、学問に真摯に取り組む研究者には、その人の学問を深く理解し、心からの支援を惜しまなかったパートナーが傍らにいた事例が幾つもあったことを読者はご記憶であろう。角張淳一・憲子ご夫妻もそうした人々に連なっていることを最後に銘記して擲筆する。

大村先生、連載を引き受けていただき折につけ励ましていただき、ありがとうございます。鴨志田篤二先生にバトンが渡ります。お楽しみに！
編集子

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (最終回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第247回)	二橋慶太郎 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第18回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚 「旧石器時代の石槍 狩猟具の進歩」	長澤有史 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第18回)

山本 暉久

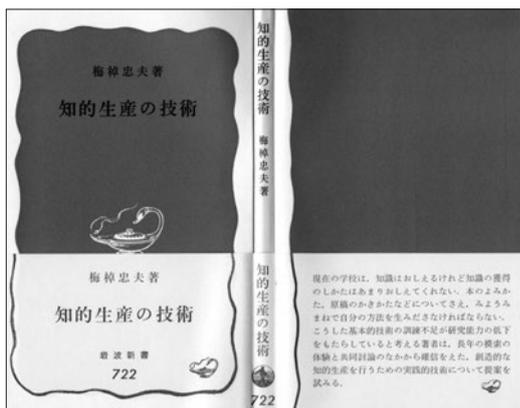
18. 神奈川県職員としての考古学 その2

研究方法の転換

前回、1973(昭和48)年4月、神奈川県庁職員として教育庁社会教育部文化財保護課に配属され埋蔵文化財保護行政に携わり始めたころのことを記したが、今回は、そのころの考古学への取り組みかたについて振り返ってみたい。

大学・大学院の学生時代の8年間を経て、ようやく職をえて結婚し、生活は曲がりなりに安定するようになった。そうした仕事への取り組みとは別に、今後の考古学研究をどのように進めるべきかを考えるようになった。昨今の行政内で埋蔵文化財を担当する職員(財団設立の埋蔵文化財センターなどの職員を含む)や民間経営の埋蔵文化財調査組織の職員の多くは、開発に伴う埋蔵文化財調査や調査報告書作成に携わっていることそのものが、考古学を研究しているものと勘違いしている傾向がみられるのではないだろうか。もちろん、そうした埋蔵文化財に対する取り組みは、考古学の研究を基礎としていることはいまでもないが、職業＝考古学研究ではないはずである。埋蔵文化財調査組織に勤めることはいまでもなく職業だから、そうした職務は当然であるが、考古学を研究することは、それとは別だと私は思ってきたし、リタイアした今も研究を継続していることに変わりはない。

そんな気持ちから、学生時代の取り組みを一旦破棄して、見直すと思ったのである。本稿の第16回で記したことであるが、学生時代に取り組んだ研究に限界を抱いていたことがそうした気持ちを増幅させることとなった。職につくと、一日の大半は仕事に割かねばならず、私的な考古学研究に割く時間は限られてしまうことはいまでもない。そこで限られた研究への時間を確保するため、早朝に起きて出勤前のわずかな時間ではあるけれど、研究に当てることにした。でも、夜にそうした時間を割けばいいのではないかわれそうだが、夜は、家で食事するさい、ついつい酒を飲んでほろ酔いになってしまい、夕食後、研究に取り組んではみたものの、昼間の仕事の疲れもあり、ふと気づくと机に向かいながら寝てしまっていることがしばしばとなってしまった。それならば、酒をやめればいいのだが、自制できないのが酒好きの悲しい性(さが)なのかもしれない。そんなことから早く寝て、朝5時に起床して出勤前の短い時間ではあるが、資料整理や論文原稿執筆の時間に当てることとしたのである。たとえ、朝の1時間程度の短い時間でも、1年間を通せば365時間になるわけで、誰かに急かされているわけでもなく、マイペースで年に1本でよいから、論文を書いて発表しようと思ったのである。



▲梅棹忠夫『知的生産の技術』1969.7 岩波新書

テーマについては、学生時代に取り組んだ縄文時代文化成立期の問題を継続することはあきらめて、あらたに縄文中期文化を研究対象とすることとした。縄文時代のなかで、中期はもっとも発展した時期であり、これまでの研究の蓄積も多く、細かな土器型式編年にもとづいて、その時代の社会のありかたや変動するさまを研究するうえで格好の時期ではないかと思ったからである。ただ、これまで中期については自分の研究蓄積は少なく、一から取りかからねばならなかった。そのため、まず縄文中期にかかわるこれまでの研究を知るために、関連する文献目録を作成し、調査報告書を含めて、それら文献をコピーなどで収集することを目指した。このころは、まだワープロやパソコンが普及する前で、梅棹忠夫が『知的生産の技術』(1969.7 岩波新書)(写真参照)で紹介した「京大式カード」(B6版の罫線入りカード、「情報カード」ともいう)を用いて文献目録カードを作成し、これをもとに文献の収集を始めることとなった。この作業は約1年間かけて行った。今は、パソコン上でデータベース化(ソフトは管理工学研究所の『桐』を用いている)しており、「京大式カード」での作成は、もはや「遺物」化してしまったが、押し入れに今も、その多量のカードが残っている。次に、それら収集した文献を分野別に分類し読破し、カードにその概要やコメントなどをメモしつつ、あらたに文献を追加していくという基礎的な作業を繰り返した。ところで、そのころは当然ながら原稿執筆は、400字詰の原稿用紙に手書きすることとなる。私の場合、まず研究テーマに沿って、論文のあらましを殴り書きする。次にこの粗原稿を推敲しつつ書き直し、最後に清書して原稿を完成するのである。今はワープロに原稿を打ち込むから、原稿を手直しすると上書きされてしまい、最初に書いた粗原稿は別に保存しない限り残らないことになる。手書きして発表してきた論文の原稿は、粗原稿を含めて手元に長らく保管していたが、退職後、それらはすべて捨ててしまい、今は提出した清書原稿と校正刷りが残るだけである。そのような研究方法で、初めて投稿した原稿が古代学協会が刊行する月刊誌「古代文化」(第28巻2・3号、1976)に掲載された「敷石住居出現のもつ意味(上)(下)」である。このことについては次回あらためて触れたい。

さて、そのような自身の研究方法の転換が始まるころ、私を含めた県文化財保護課に勤める若き研究者たちは不定期ながら研究会を開催していたが、それを発展させて同人雑誌を刊行しようということになり、神奈川考古同人会(代表 小川裕久)が創設され、1976(昭和51)年5月、会誌『神奈川考古』第1号が創刊された。同人であれば誰でも気軽に投稿できる、今も続く『神奈川考古』の始まりとなった。

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英之記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 247

特別史跡名古屋城跡 ～愛知県名古屋市中区～ 二橋 慶太郎

はじめに

名古屋城跡は、名古屋駅から2kmほど東に位置する近世城郭です。城域では金鯨を備えた天守閣や、築城期の面影を残す長大な石垣を見学でき、市内でも屈指の観光スポットとなっています。

名古屋城の築城は慶長15年(1610年)から開始され、石垣等の構築は加藤清正ら北国、西国の20家の大名が築造を担い、早くも同年末には完成したとされています。慶長19年(1614年)には將軍秀忠が入城し、検分が行われました。

こうして築城された名古屋城は、天守や櫓、石垣等の防御施設が設けられたほか、御殿や庭園等も整備され、壮麗な建造物、優れた縄張りの設計から近世城郭の最高峰とも称されています。近代以降も建物の多くは新政府に継承され、昭和7年(1932年)には城郭として初めて旧国宝に指定されました。

しかし、太平洋戦争末期、米軍の空襲により天守や御殿をはじめ、多くの建物が焼失しました。幸いにも隅櫓や門等の一部は戦災を免れ、戦後新しく施行された文化財保護法のもと、昭和27年(1952年)には国の特別史跡に指定されています。

こうした名古屋城の学術的な調査研究の推進を目的として、令和元年(2019年)に名古屋城調査研究センターが設立されました。本稿では、これまで調査研究センターが行ってきた石垣カルテの成果を基に、石垣の魅力をご紹介します。

石垣カルテについて

名古屋城の石垣は総延長約10km、約360面の長大な面積を有し、今なおその大部分が築城期の姿を留めています。

こうした石垣を後世に伝えていくため、石垣カルテの作成を進めています。石垣カルテとは、石垣の規模や石材種等の基礎情報、石垣の変状の程度や位置をまとめたもので、今後の石垣整備の基礎資料となるものです。調査自体は平成29年から開始し、一面一面地道な調査を進めています。



▲東南隅櫓下の石垣(櫓の中央下より左が加藤家、右が池田家の石垣)



▲石垣左隅の花崗閃緑岩(加藤)



▲石垣右隅の「竜山石」(池田)

石垣カルテで分かった大名の石材利用

石垣カルテの作成により、名古屋城の石垣の知られざる歴史も明らかになりつつあります。特に注目されるのが石垣に用いられた石材です。これまでも、名古屋城の築城に当たっては三河湾沿岸(愛知県)や養老山脈周辺(岐阜県)で石材を採取したことは既に知られていましたが、実際に石垣を詳細に観察すると、大名ごとに石材利用に個性があることが分かってきました。

一例として挙げられるのが、本丸の一角、東南隅櫓下の石垣です。本石垣は高さ約13mの高石垣で、石垣の左側から2/3を加藤嘉明(伊予)、残りを池田輝政(播磨)が担当したとされています。実際に、石垣の角の部分を観察すると、加藤家では、表面が暗めな色調の花崗閃緑岩を用いているのに対し、池田家では明るめな色調の「竜山石」(流紋岩質ハイアロクロサイト)を用いたことが分かりました。「竜山石」は、名古屋城近辺では分布が無く、池田家の領国内(現在の兵庫県高砂市周辺)でよく見られます。これまでの石垣カルテ作成により、この石垣に限らず池田家やその助役大名は、石垣の角部分にこの「竜山石」を用いたことが明らかになってきました。石垣の角部に使う石材は「角石」と呼ばれ、石垣の中でも特に大きな石材です。池田家はその角石をわざわざ遠方から名古屋まで運んだようで、石垣工事にかける池田家のこだわりを感じ取ることができます。この石垣は、観覧ルート上からよく観察できますので、名古屋城にお越しの際はぜひご覧ください。

名古屋城石垣の普及事業

以上のように、名古屋城調査研究センターでは石垣の調査研究を進めており、これらを市民やお城ファンへ周知するため普及イベントも行っています。令和5年度は「石垣をつくる・なおすー最新の調査成果から分かる石垣のなりたちー」と題してシンポジウムを行いました。

シンポジウムでは、石垣カルテ等の調査成果を報告したほか、基調講演には濱田晋一先生(名古屋工業大学大学院教授)をお招きし、全国の城郭から見た名古屋城の位置づけ、名古屋城跡における普請大名の技術差等について講演をいただきました。

コロナ禍の影響もあり、当センターとしては初めての大規模対面イベントではありましたが、定員100名のところ400名以上の応募をいただき、名古屋城や石垣に関心を向けてくださる方々が多くいらっしゃることを改めて感じ、今後も石垣に関する調査研究、普及事業を進めたいと思いを新たにしました。

おわりに

名古屋城調査研究センターは、今年で設立6年目と比較的新しい組織で、埋蔵文化財担当者も20代、30代が大半を占めています。石垣の調査研究もまだ始まったばかりではありますが、今後も調査成果を分かりやすく発信していきます。是非ご期待ください。

参考文献:

田口一男ほか2019「石材から見た名古屋城跡」楯山学園大学編2019「教育学部紀要」pp.217-231

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは浅岡優さんです。

考古学者の書棚

『旧石器時代の石槍 狩猟具の進歩』

白石浩之 著／UP考古学選書〔7〕東京大学出版会(1989)

長澤 有史

はじめに

一年浪人を経て大学に入学した私は、学芸員になろうと漠然とした心境でいた。文学部歴史学科にて日本史、東洋史、西洋史、イスラム圏史と文献資料による講義を受ける中、考古学概説を受講し考古資料や遺跡に魅了された。早速、考古学概説の担当教官であった白石浩之先生の研究室にお邪魔し、いくつか概説書をお借りした。突然の訪問にも関わらず、温かな空気で迎えていただいた白石先生にお世話になること9年。当時は大学院の博士課程満期退学までお世話になるとは全く予想していなかった。白石先生の影響を濃厚に受け、石器研究に没頭した。そして卒業論文、修士論文と旧石器時代の終わりごろから縄文時代草創期の石器群を対象に持論をまとめた。

今回、ご依頼をいただいた時に白石先生の数多い著作の中で『旧石器時代の石槍 狩猟具の進歩』が一番初めに頭に浮かんだ。以下、その概要をまとめる。

本書の内容

奥付を見ると1989年4月刊行、白石先生は当時神奈川県埋蔵文化財センター副主幹でいらしゃった。本書は項数105ページA5版、構成は「Ⅰ 石槍とはどんな石器か」「Ⅱ 石槍の製作」「Ⅲ 石槍の変遷」「Ⅳ 石槍文化の様相」である。「尖頭器」と呼称されることが多い石器ではあるが、白石先生がタイトルを「石槍」とした理由は「ヤリの歴史的な意義を評価し、槍先としての石器を石槍として総称する」とある。学術用語をいかにわかりやすく伝えるのか、一般の方への配慮を認識できる。巻頭には神奈川県大和市の月見野遺跡群上野遺跡の石槍がカラー写真で掲載され、石槍文化が独自性をもつ段階として解説されている。私はこの写真から白石先生の石槍への強い研究意欲を感じた。

「Ⅰ 石槍とは」では旧石器時代のヨーロッパ、北アメリカ、アジアなどの事例を記載し、日本の石槍研究の学史をまとめている。その中で重視されている視点は編年的な位置付けやその盛衰についてである。

「Ⅱ 石槍の製作」として石槍の使用石材、片面加工、半片面加工、両面加工などの製作技術、使用方法にふれ、遺跡内での集中地点や、石器形態としてのまとまりを「柳葉形」「木葉形」「広葉形」の3類型を提示する。

「Ⅲ 石槍の変遷」では、初めに各台地の層序と石槍の出現から消失までがどの層序でみられるのか述べている。そして相模野台地を中心に各層位における出土事例を丹念に記され、石槍の変化を明らかにしている。その後、全国各地域として、武蔵野台地、下総台地、北関東地方、東海地方、中部地方北部・南部、東北地方、瀬戸内地方、九州地方、北海道地方の10に区分し、詳細をまとめている。この全国的な視点により、石槍の発達と地域差を指摘している。

「Ⅳ 石槍文化の様相」として以上の層位的出土例を基に、全国的な編年を提示し、大きく第1～4期としている。第1期はナイフ形石器と伴うものの、点数がそれほど多くない段階、第2期はナイフ形石器よりも多く出土し、狩猟具の主体となる段階、第3期

は石槍が全国的に展開し、発展していく段階、第4期は細石刃と共に出土し、大型や丁寧な両面加工がより顕著になる段階となる。

さらに石槍の出現をナイフ形石器が圧倒的多数を占める時期に出現したものと考え、その面的な剥離に注目し、同様の製作技術である角錐状石器からの影響を指摘した。さらに石槍の消滅については、縄文時代草創期の有舌尖頭器や木葉形尖頭器へと機能分化し、最後には石鏃の出現により狩猟具としての地位を譲ったものとした。

まとめとして、石槍が発達した時期を環境の変化による狩猟具変化とし、人類の狩猟用具の発達の中で顕著なものとして評価した。またナイフ形石器との共伴が長く、次第に狩猟具の主体となること、旧石器時代の終わりごろでは細石器や大形石槍や大形石斧をもつ神子柴系石器群が登場し、かなり錯綜した状況となる。相模野台地では細石刃が比較的短期間で衰退し、石槍石器群を母体として、後続する縄文時代草創期の石器群へ移行するものとした。総じて後期旧石器文化を代表する石器として「石槍」を位置づけている。

以上、多くの視点から石槍を検討し、「石槍とは何か」、その答えを提示している。特に全国的な視点から石槍の変化とその変遷を示した点は重要である。各地域性の出土例を集成し、どのような変遷があるのか提示することはそう簡単ではない。本書は豊富な図面や解説から読みやすく、石槍がどのようなものか直感的に理解しやすい。あとがきでは、大学院生のころ野川遺跡での発掘調査にて、ナイフ形石器が複数の文化層から出土しつつも石槍が台頭していく様相から、どのようにして石槍が生まれたのか、素朴な関心を持ったと述べられている。振り返れば、私が縄文時代草創期などの石器群を検討するようになったのは、大学での考古学実習で愛知県田原市宮西遺跡を発掘調査したことがきっかけである。遺跡から学ぶ姿勢をこれからも大切にしていきたい。

おわりに

石器の魅力は計り知れないものがあるが、なかなか一般的とは言い難い。個人的に展示で苦心するのは細石刃であり、石刃、石核、剥片、文化層…苦戦する単語も多い。分かりやすさを重視しつつも、自身の専門分野ゆえの学術用語の多用や、簡易な表現に悩んでいる。そのたびに本書を開き、参考としている。

本書は刊行され35年が経過しているが、主張の一貫性や読みやすさは特筆すべきであり、石器を学びたい方、「石槍」を学びたい方へぜひ読んでいただきたい。白石先生の著作として、『石槍の研究』ミュゼ(2001)、『旧石器時代から縄文時代への転換 土器が出現する頃の文化変動』雄山閣(2021)などが刊行されており、こちらも併せてご一読をお勧めする。

文末ではありますが、白石先生の日頃のご指導ご鞭撻に感謝し、益々のご活躍とご健勝を祈念します。

アルカ通信 No.255

発行日 2024年12月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp